

群馬詩人クラブ

会報

No. 283

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／井上英明

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒373-0806

太田市龍舞町5486

印刷 三協印刷

振替番号 00160-4-708314 中澤陸士

群馬詩人クラブ回顧

梁瀬和男

主な記事

- 現代詩作品展報告……………2
時澤 博
- 第18回高崎ストリートライブのお知らせ…3
- イベント報告……………4
あすなる忌 房内はるみ
真下 章展 金井裕美子
- 書評……………5
大塚史朗詩選集 井上英明
- 詩の広場……………6
田中良三／原田 鰐
- 次期幹事改選結果……………7
- 受贈誌誌御礼……………7
- 平成25年度総会・秋の詩祭案内…………8

群馬詩人クラブの発足は昭和三十二（一九五七）年の五月で、現在から五十六年前である。クラブ設立に関係した者として当時の結成の目標を回顧すると様々な感慨に誘われる。当時、設立関係者は、何よりも県内詩人たちの交流の場を作り、そこで協議し行動に移す事を方針とした。その協議の中で計画されたのが、現代詩に関するシンポジウムや、各同人誌の主張の発表などであった。そのような集会は年に二回ぐらい開催されたが毎回、盛況であった。記憶をたどると、次のようなテーマが思い出される。

「私たちの詩誌の主張」

「詩に関する研究発表」

「群馬年刊詩集の作品の合評」

このような集会の場合、幹事会では事前に発言者、司会者を決めておいたが、いつも活発な意見の交換が出来て、詩をかく人たちの間の友情と信頼も自然な形で醸成されて行った。そしてこれらの集会の模様は「会報」で紹介されたが、時にその掲載された意見に、反論、疑問などが寄せられる事もあり、幹事会はそのような討論の連鎖を尊重した。

また「会報」では郷土輩出の詩人への感想や作品鑑賞を企画して、その詩的遺産の継承についても配慮した。現在の「会報」にそれらの掲載がないのが惜しまれるが、戦後、県内の詩の運動を推進した詩人たち——例えば高橋元吉、東宮七男、岡田刀水士、清水房之丞、渋谷国忠ほかの方たちに関する詩人論や

作品の鑑賞にも、詩人クラブは取り組む必要があると思う、それらの先達詩人の作品、評論、エッセイの中には、私たちが注目すべき多くの遺産が残されていると思うのである。

次に特記したいのは、「会報」で当時の政治的社会的課題に対する会員の意見を集めた事である。例えば昭和三十四（一九五九）年三月発行の、「会報」十八号には、「日本の現状をどうとらえどう行動するか」という特集がある。当時は日米安保条約の改正をめぐる、国論を二分する状態にあった。詩人クラブでは、この歴史的現実に対する会員約十名の意見を集めたが、それは、詩人の現実認識を問う企画でもあった。当然の事のように幹事会は独自の見解を発表しなかったが、会員全員のアンケートによる集計を、行うべきではなかったかと、今ふりかえっている。

現在、「日本国憲法」に関する論議が、戦後始まっての問題となっているが、このような重大な課題に対して、私たちも確固たる認識をもつべきであろう。そして、「会報」にこのような現実的課題への、発言が必要だ、と私は今思っているのだが、それは、詩は現実から遊離してはならないと考えるからである。

詩人クラブ発足以来五十六年、ふりかえると、すぐれた詩を書いた友人たちの多くが、他界したのに気づく。そして長い伝統を支えて来た多くの人に心から感謝している。

第21回 現代詩作品展

「さ・わ・る」



現代詩作品展報告

時澤 博

出品者と作品

第二十一回現代詩作品展が、六月十六日

三十日、前橋文学館3Fで行われた。「さ・

わ・る」をテーマに、二十三名の会員が思い

思いに趣向をこらし出品した。今回は、文学

館の共催という当クラブにとっても、画期的

な作品展となった。イベントは二十二日。一

部は、ゲストの三角みづ紀さんによる映像。

そして、蛭子健太郎氏のコントラバスと詩の

朗読によるコラボ。体調不良をおしてのパ

フォーマンスに、しばし異次元空間の中に置

かれたかのような不思議な体験をさせていた

だいた。第二部は、会員による詩の朗読会。

個性派ぞろいの詩人たちが発する一つ一つの

言葉は、とても味わい深く光っていた。その

後は、場所を変え懇親会。労をねぎらい、互

いの親交を深めた。

新井 啓子

「なつのわな」

新井 隆人

「五十音詩1」他一点

泉 麻里

「はなびら」

井上 啓二

「いつわりの木」他一点

井上 英明

「触る」他二点

金井裕美子

「解体心結」他二点

狩野 務

「さわる」他二点

柄澤 絢子

「霧」他二点

川島 完

「人差指哀歌」他一点

木村 和夫

「朔太郎が愛した利根川を行く」

佐伯 圭

「さわらないもの
—私語するものたち—」

三枝 治

「土筆」

志村喜代子

「畳に触る」

須田 芳枝

「潮騒を聞く少女」他二点

関 和郎

「うつろう・まち」他一点

関口 将夫

「眼でさわる」他五点

関根由美子 「座繰のうた」他一点

堤 美代 「さほるのは 一蓮托生 末摘花」

富沢 智 「想像力発生装置・キュービー4号(改良型3号機)」

時澤 博 「白馬く上高地く函館く爪木崎の旅」

中澤 睦士 「帰水の橋」

平野 秀哉 「山頭火のうた」

福田 誠 「七夕とくとくクーポンII」

他七点

(敬称略)

今回は前橋文学館様の協力を得て六月十六

日より六月三十日というロングランで開催さ

れました。六月二十二日には三角みづ紀氏に

による映像と朗読と蛭子健太郎氏のコントラバ

スの一部とし、二部には群馬詩人クラブ会員

による朗読会が行われた。朗読者は一七名

で、田口三船、川島完、曾根ヨシ、金井裕美

子、狩野務、三枝治、時澤博、福田誠、奥重

機、木村和夫、佐伯圭、神保武子、中澤睦士、

平野秀哉、志村喜代子、新井隆人、関口将夫

の各氏であった。第二十一回 群馬詩人クラ

ブ現代詩作品展は、前橋文学館様との共催で

大いに盛り上がったイベントとなったと思

います。

第二十一回 現代詩作品展

ご来場者アンケート

◆七〇代女性

一寸場ちがいのところに来た感じで戸惑いました。朔太郎文学館なのですから「地域の詩人の詩を発表する場」本日のような催しがあつて良いと思います。

◆六〇代男性

詩の朗読にミュージック(演奏)をコラボする場合は、言葉が聞き取り難い為に音の調整(音量)が難しい。

◆六〇代男性

各自の個性が詩の中に表現されていて、とても興味深かった。これからも個性あふれる詩を発表して下さい。

◆六〇代女性

詩人クラブの作品展、もっとむずかしくいろいろ考えさせられると思つていましたが、色々な作品に出会えて楽しかった。

◆六〇代女性

詩は遠くにあつて、高いところにあると思つていましたが、この作品展を見させていただき、一寸身近に詩がある気がします。

◆七〇代女性

作品に対する作者の感じ方の表現が、すごくおもしろく思いました。

◆六〇代男性

ことばにする前の詩人の心の中で、どのような発見がうまれるのか訊いてみたい。

◆二〇代女性

一つ一つに素晴らしい個性を感じました。群馬県だからこそ、このように個性を持つた方々の作品がたくさんの人々の目に入る機会があつたらばと思います。

◆一〇代女性

いろいろおもしろいものがあつて楽しかった。

このほか多数の方よりアンケートを戴いており、誠にありがとうございます。詩人口が老齢化していると感じている現在であるが、若い方も興味を持っていくれる、そんなアンケートでした。六月十六日から三十日までの来場者は三二〇名でした。会場の関係からか前橋市の方が多かつたようです。埼玉県からも来場下されるなど、会員の協力と前橋市文学館様のバックアップで成し得た数字と幹事一同、ここに感謝を申し上げます。

第十八回

高崎ストリートライブの
お知らせ

【視詩展(ビジュアル・ポエトリー展)】

会期 9月14日(土)～10月13日(日)

出展者 新井颯子・新井隆人・岸本美奈子・

北爪満喜・國峰照子・関口将夫・

田名部ひろし・支倉隆子・濱條智

里・森郁男

会場 cafe あすなろ Tel.027-384-2386

〒370-0827 群馬県高崎市鞆町七三

入場料 無料

【言葉のパフォーマンス】

日時 9月22日(日)午後4時～

出演者 新井啓子・北爪満喜・くぼんぼん

(新井隆人+國崎理嘉・関口将夫・

橋上/ちゆうサン(パントマイム)

会場 cafe あすなろ Tel.027-384-2386

〒370-0827 群馬県高崎市鞆町七三

入場料 無料

【言葉のパフォーマンス】

日時 9月29日(日)午後4時～

出演者 Uraochi・てあしくちびる・ハハノ

シキユウ・松浦健太

会場 cafe あすなろ Tel.027-384-2386

〒370-0827 群馬県高崎市鞆町七三

入場料 無料

「あすなる忌」に寄せて

房内はるみ

再び「あすなる」に灯がともった。六月十六日、旧「あすなる」を高崎市が改装し、高崎経済大学の学生達が運営するコミュニティカフェ「あすなる」で、第12回「あすなる忌」が行われた。

はじめに、あすなる忌発起人会代表の曾根ヨシ氏が「この場所で『あすなる忌』を開催できてうれしい」と述べ、それから同会で上毛新聞論説委員長の藤井浩氏が「若い人たちの力で、また新しい『あすなる』を作ってほしい」と、学生達にエールを送った。同氏がまとめた「あすなる」小史では、崔華國がジャーナリストとして、日本と韓国を行き来していたこと、映画『ここに泉あり』に感動し高崎市に「あすなる」を建てたこと、そこで行われた「生の音楽の夕べ」「詩の朗読の夕べ」神津・荒船牧場で行われた「詩人とつどう会」などが書かれ、「あすなる」の歴史と、崔華國という希有な人物を知るうえで貴重な一冊であると思う。

そのあと、第六回萩原朔太郎賞を受賞された詩人財部鳥子氏が「高崎あすならと崔華國」と題して、講演を行った。

講演の内容は「長田弘さんから『なつかしい時間』という本が送られ、その中に『変わった人』というのがありました。私が思い浮かんだのが崔華國さんです。高崎という地方都市に細部までこだわった洒落たインテリアの店を建て、そこに詩人、音楽家、画家を集め、色々な催しで、交流の場を設けたこと。また一九六六年六月十七日は忘れることができません。私も参加しましたが、バスに嵯峨信之、会田綱雄、天沢退二郎、石垣りん、田村隆一、那珂太郎、中桐雅夫、吉原幸子、その他第一線で活躍している詩人たち四十五人を乗せ、また群響のメンバー四十人も加わり神津・荒船牧場で『詩人とつどう会』を行いました。一晩飲んで、食べて一夜を明かしました。こういう発想と情熱は『変わった人』でなければできません。そして『詩人とつどう会』の思い出話をされた。また『変わった人』が、同時代に、また後世に遺したものは、今なお私達をちゃんとさせる何かです。それは人の人としてのダイクニテイ、尊厳ということですから。でも今日の社会は『変わった人』が少なくなって、社会の空気を生気のないものになっている気がします。」とも述べた。

また、一時期前橋に住んで詩活動をした草野心平や、「詩人とは特権ではない。不可避である。」と言った高村光太郎にもふれた。

最後に、元群響のメンバーによる演奏と、詩の朗読があり、その日は終わった。

「あすなる」の夢が、ふたたび戻ってきたような一日だった。

広瀬川美術館(会期：六月十日(土)～六月三十日(日))

真下章展「いろはにこんべと」

真下章の仕事―詩・エッセイ・木版画―

いい作品と対峙できる喜び

金井裕美子

真下章さんの展覧会は、以前、上毛新聞社刊・郷土誌「上州風」に連載されていた(『いろはにこんべと』の木版画の原画とエッセイを中心に構成。観応え、読み応えがあった。

会場は広瀬川美術館。全国初の国登録有形文化財建造物としても知られている。昭和二十三年に画家の故近藤嘉男氏の自宅兼アトリエとして建てられ、補修・改築の後、平成九年より一般開放された私設の美術館である。

この美術館では、詩に理解ある酒井重良副館長が二〇一〇年より年間企画の内の一、二回ほど、詩と絵による展覧会を企画している。画家である酒井副館長とは、群馬県美術展を通して前々からの知り合いだったということもあって、展示する詩を選んだり、詩の作者に連絡をするなど、できる範囲でほんの少しお手伝いしている。

今年もまた詩のある絵画展をしたいとの相談を受けた時、十年以上前に群馬詩人クラブの詩画展で拝見した真下さんの木版画を思い出した。「上州風」に掲載されていたエッセイと木版画の頁も頭をよぎった。

詩集『神サマの夜』が第三十八回日氏賞を受賞されたことで、詩の知名度は高いが、素朴でどことなく翳りを含んだ木版画は、魅力

的でありながら、これまで表舞台に立つことはなかったように思う。だから、真下作品のファンのひとつとして、もしもこの好機に、真下さんの作品を観せていただけることが実現したら嬉しいなど、ただそれだけの気持ちで美術館と真下さんの仲介役を引き受けた。

「俺の作品なんかで展覧会ができるんかい？」作品をお借りしたいと申し上げたわたしに、真下さんは心配そうに何度も訊き返された。そして快諾。以前にも個展開催の話が出されたこともあったが、実らなかつたのだと数名からお聞きした。今回、ようやくその時がきた、ということだったのである。

作品に魅了され、何度となく来館された方も多かったそうだ。(木版画は独学で習得したと詩人は言いますが、その見事な造形センスは、天性のものと思われませう。)と本展のチラシにあるが、配置や色彩の繊細さや大胆さ、独自の工夫、切り取りの妙にも氣質が現れていて(エッセイも同様)、何度見ても楽しめた。

木版画に向き合うと、桐生和紙の風合いと穏やかな佇まいの色や形が静かに語りかけてきた。エッセイから発せられる作者の生きる姿勢や厳しい自己問答が烈しく響いてきた。

真下章という詩人は真下章の人生をこのようにしか歩きようがないという歩き方で、詩「満月」そのままに、生きてきたのだとあらためて打たれた。誠実さや切実な想い、ことばの強さや重さに圧倒され、心揺さぶられ、いい作品と対峙できる喜びを感じた。

書評

抒情とユーモアと頑固さと

大塚史朗詩選集を読んで

井上英明

一九七六年の第一「頬かぶり」から二〇一二年の第十六詩集「記念樹」までの三六六年間の選詩集である。詩を書いている期間はこれよりも長いはずだ。この期間、大塚氏の視線は全くぶれていない。農作業を通しての視線、戦争体験を通しての視線、子育てを通しての視線で詩を書き続けている。時間の経過は記憶を曖昧にし、自らの価値観すら曖昧にすることがある。しかし大塚氏は時間の経過に妥協しなかつた。この大塚氏の姿勢を反骨と呼んでしまうと少し意味が違ってくる。頑固なのである。この頑固さはきつと、農家として土と社会に触れ、そこで感じ取った矛盾を矛盾と言いつける姿勢である。

この頑固さをユーモアと抒情で整えていくやり方が大塚氏の特徴なのだろう。

「いつも／ふみつけられるもの／むしり取られるもの／その／ながい／なれあいが／絶えず／身がまえる／ひとを／寄せつけぬ棘をもつ／ひとり／ほのかに光る花を／咲かせるために」

第一詩集にある「あざみ」の全文であるが、「ふみつけられるもの／むしりとられるもの」が大塚氏の立ち位置で、「ほのかに光る花」と書き止めることが決して甘くはない大塚氏

の抒情なのだ。

大塚氏の詩群には、家族のことを題材にした詩がちりばめてある。第二詩集の「成長」には、「娘」の成長に途惑う父親の哀愁のよなものを感じさせてくれるが、この詩の前には理不尽な権力に対するアイロニックな鋭い刃の詩である。別個な詩として成立させながら、並列させることで同一の視線の高さを感じさせる。また、先祖を題材にするとき、ユーモアに富んだ表現をする。同詩集の「なすびの馬」は先祖が苦勞して開墾した土地が荒れてしまったので、送り火の時は横を向いて提灯の火が消えてしまいうなほ急いで通りぬける、といった情景だが、先祖は「なすびの馬」から振り落とされないようにしがみついているというのである。ユーモアに諦めを加えればニヒルになるが、大塚氏は諦めではなく現状の追認と立ち位置の確認なのである。だから詩を書き始めて三六六年間視点がぶれないのだろう。

戦後六八年が経過した。痛みや悲しみ、そして憎しみを希薄にするのは、老いていく脳細胞のためだけではない。今しなければならぬことに、大塚氏は詩という形を選んだ。マザー・テレサは言う。「愛の反対は憎しみではなく、無関心である。」と。だから無関心でいられない大塚氏にとって、憎しみと愛は同義語なのだ。

詩の果たす役割は様々だが、大塚史朗「詩」が絶滅危惧「詩」になるのはまだ早いのだ。

詩の広場

織都にて

田中良三

待合室の最前列にいつもの笑顔があった
 駅から徒歩数分の寿司屋に直行
 連日の猛暑をあいさつがわりに
 話は 足の衰え 飲み薬の増加などどこか
 達観してしまつた健康談議
 お料理を話のつまに 思い出先行の身辺整理
 亡くなられた方の話 跡継ぎ 終末期の自分
 の姿 妻に先立たれたら・・・

閑話休題

四十年前空つ風と雷の県都での邂逅 深夜に
 及んでも尽きない国語教育論 時に胸痛くなる
 生徒指導 休み返上の進路指導 どこを切り
 取つてもあなたがいた
 あなたのゆつたりした物言い 聞き上手 包
 容力 ユーモアーに支えられた幸せな十年間

生涯の持ち時間が均等であつたらあんなにあ
 わたらしい時間を過ごさなくてもよかつたの
 に 生徒一人一人をもつとゆとりをもつて見
 てやれたらうに 通勤片道一時間の電車の中
 採点 授業の準備 作文の添削 職員会議の
 準備 終電の貴重な睡眠
 ゆつたり流れるリタイアの時間 四六時中自

分持ち 自分で色つけできる時間 味付け
 自由のわが時間 賞味期限ぎりぎりの貴重な
 時間

また閑話休題

人間が信じられ 未来は明るく輝やいていた
 いじめ 不登校 体罰などは現実味に欠け若
 者の就職難は話題にもならなかつた 東西の
 冷戦 右肩上がりの経済がいつまで続くと思
 い込んでしまつた こんな時代を見通して教
 育して来なかつたな 時間はさかのぼれない
 からね 厳しいね

「sing (アイエヌジー)」中の森山良
 子の「あれあれ」状態 視力の衰え 年金福
 祉・・・心許した二人の話は 三時の列車の
 時刻であわただしく幕となつた

勤め先は変わつても 変わらざる交流
 四十年余の時のメガネで遠望すれば あなた
 の公正さ 他への配慮 人間理解の深さが縦
 糸のように貫いているのがつきり見える
 織都の駅で「いい時間をありがとう」という
 言葉とともに来た時と同じ最前列で送つてく
 ださつたあなたに手を振りながらその思いを
 一層深めていた

森に棲む

原田 鰐

いらつしやいませ
 こんにちば

わるくはない

いらつしやいませ
 こんにちば

ほどよいあかるさの下で
 右脳でできている

いらつしやいませ
 こんにちば

空気がざわめいて
 なにかが羽ばたく

なつとくできないこと
 あえてあげると

ちち
 ははそして
 わたしという空白

ひとはその半身で生涯を生き
 もういつぼうをのこしてみんな死ぬ

いらつしやいませ
 こんにちば

またきょうも
 こずえでとりは囁いている
 わたしは森に

棲むひとだ

次期幹事改選の投票結果

次期幹事の選定について、無記名・五名連記・七月十五日締め切りで投票をお願いいたしました。集計結果をご報告いたします。

○投票者数四十四人（投票率三十六％）

得票数（高得票数順・同数の場合五十音順・敬称略）

- 十票 泉麻里 伊藤信一 奥重機 佐伯圭
- 八票 新井啓子 大塚史朗 大橋政人 狩野務
- 七票 愛敬浩一 小野啓子 須田芳枝 富沢智
- 六票 三枝治 武井幸子
- 五票 金井治子 木村和夫 篠木登志枝 関口将夫 平野秀哉
- 四票 磯貝優子 川島完 神保武子 曾根ヨシ 鶴田初江 福田誠
- 三票 佐藤恵子 清水由実 志村喜代子 堤美代 平石佳弘
- 二票 神尾敏之 城田博己 高田美美 田中良三 房内はるみ 山田弘子
- 一票 白井三夫 江尻潔 岡部久 上林忠夫 剣持昭義 小鮎美江
 提箸宏 佐島吉美 須田和子 高橋克彦 田口三船 田村雅之
 長谷川安衛 原健十三 原田鱒 原田道子 福田尚美 真下宏子
 三方克 宮崎清 山田八重子

以前からの申し合わせにより、現幹事十名全員が退任し、これらの方の中から新たな十名の幹事をお願いすることになります。それぞれ、ご事情やご都合もあらうかとお察ししますが、当該の方々のご協力を切にお願いいたしますとともに、投票に参加いただいた会員の皆様に熱く御礼申し上げます。

受贈詩誌御礼

*御惠贈感謝致します。

- 詩誌「嘶馬」15 長谷川安衛
- 詩と批評「龍」 龍詩社
- 夜明け178 群馬詩人会議
- 詩集「ゴツタ」 佐伯圭
- 詩集「うしろの月」 新井頼子
- 濫書堂通信28 29 30 詩的現代の会
- 詩的現代5 佐伯圭
- SCRAMBLE124 高崎現代詩の会
- 季刊「榛名団」7 榛名まほろば出版
- 文芸・映画評論集「影と飛沫」 愛敬浩一
- 伊勢崎文学33 宮川勉
- 個人詩誌「河」27 柳沢幸雄
- 裳120 裳の会
- 詩集「化石」（復刻版） 柳沢幸雄
- 萩原朔太郎受賞者展覧会
- 佐々木幹郎「明日」 前橋文学館
- 個人詩誌「SUKANPO」15 田口三船
- 詩集「たま」 藤波透
- 詩誌「烈風圏」25 烈風圏の会
- 栃木県現代詩年鑑H25年版 栃木県現代詩人会
- 中四国詩人会「ニュースレター」34
- 宮城県詩人会会報17
- 関西詩人協会会報70
- 福井県詩人懇話会会報82 静岡県詩人会
- 静岡県詩人119 静岡県詩人会
- 鳥取県現代詩人協会報「とっとり詩人」28
- 福島県現代詩人会会報105
- 山形県詩人会会報24
- 山梨県詩人会会報12
- 涙るい工房「裸心版」
- 福岡県詩人会会報156
- 兵庫県現代詩協会会報33
- 中日詩人会会報177
- 石川詩人会会報「いしかわ詩人」63 36
- 日本詩人クラブ広報「詩界通信」
- 千葉県詩人クラブ会報222
- 秋田現代詩協会会報48

（八月二十日現在 敬称略）

こまつかん

平成二十五年年度

総会及び

秋の詩祭の

お知らせ



平成二十五年年度総会及び秋の詩祭を左記のとおり開催いたします。

会員の皆様方、万障お繰り合わせのうえご参加くださいますようお願いいたします。

期 日 平成二十五年十一月二十三日

(勤労感謝の日)

場 所 前橋テルサ4階 第3研修室

受付開始 午後1時30分

総 会 午後2時～2時30分

秋の詩祭 午後2時40分

講師 田中 武氏

演題 「詩のはじめ、詩の事情」

懇親会 午後4時

会場 前橋テルサ1階

オリビエターナ

会費 四〇〇〇円

〈秋の詩祭・講師紹介〉

田中 武氏

〒957-0021

新潟県新発田市五十公野四七七八

電話 0254-2216339

電子メールアドレス

qdp26rtd@lake.ocn.ne.jp

略歴

一九三四年新潟県北蒲原郡五十公野村(現新発田市五十公野)に生まれる。

一九五三年一九歳頃から文章倶楽部(現代詩手帖の前身)に投稿。一九五五年に投稿の常連たちで結成された「ロシナンテ」に参加。同人に石原吉郎、粕谷栄一、小柳玲子らがいた。一九五九年「ロシナンテ」解散。

以後、個人詩誌「ゆすりか」や新潟県内の詩誌「ブイ」「誰」「海構」「辻」「空の引力」などによって詩作活動をする。また、一九七七年から小山和郎個人編集の詩誌「紙鷲」「凧」「幫」に同氏の要請で継続的に詩作品を掲載した。

出版詩集

一九七六年『茅原忌』(自家版)

一九八六年『旅程にない場所』(紙鷲社)

二〇〇六年『驟雨の食卓』(紙鷲社)

二〇〇九年『雑草屋』(花神社)

所属詩誌

「その空の原で」

所属団体

日本現代詩人会
新潟県現代詩人会

編集後記

〇すごい夏が去って行きました。猛暑が続き、局地的豪雨があり、水瓶地域には雨がなく、敗戦ではない終戦記念日があつて、地震の誤報はあり、原発事故はいまだ解決の糸口さえなく、今後どうなっていくのだろうかという気がかりは募るばかりです。

〇次期幹事改選は36%の投票率を得ました。投票参加に心よりお礼申し上げます。高得票者順に幹事依頼をしているところですが、お受けいただくのには難航しておりますが、お受け下された新幹事に総会の席上で温かな拍手を贈って下さるよう、又、現幹事同様ご協力をお願い致します。

〇次回の会報(二八四号)は、「総会」「秋の詩祭」の特集となります。「秋の詩祭」の講師は「第二次・詩的現代」(富岡市)の同人である田中武氏(新発田市)です。群馬の事が、どの辺でどう語られるのかも楽しみです。ご期待下さい。
(堀江拜)

